

# 第6回自治労東京都本部 ラオスカンボジア子ども支援ツアー



SCADPスタッフのペーパーサート・ワークショップの実施

現地のスタッフが少人数で識字教室を運営していることから、一人でも演じられる内容のカリキュラムとして構成、ペーパーサートの基礎から製作・実演まで4班に分かれて実施した。

カンボジアのスラム街の学校に行けない子どもたちを対象に識字教室を実施している現地NGO・SCADPのスタッフ等の22名を対象とするものであった。ペーパーサートの演題は現地にも類似の民話があるとされる「うさぎとかめのかけくらべ」。

今年で6回目となる都本部国際交流ツアーも、これまでの「ラオスツアー」に加えて、「ラオス・カンボジア子ども支援ツアー」として、7月18日から26日まで実施し、9単組から25人が参加した。今回のツアーは初めての参加者が15人であり、初めて参加する単組も2単組増えた。今回のツアーから学んだことを今後の組合運動や、自分たちの仕事に生かすと共に、都本部の国際交流活動の取り組みのますますの広がりが期待されるものとなった。

## 今年の特徴

今年の特徴

まず、都本部ツアーの最大の特徴であるペーパーサート研修は、ラオスにおける基本任務が終了したという判断により、今回は、カンボジアでの実施を決め、初年度実施ということを踏まえ、ワークショップとして2日間の日程で実施。

## ペーパーサートのワークショップを実施



孤児院に卓球台を寄贈

受講生はとても熱心で積極的にであり、ワークショップは、笑い声の耐えない和やかな雰囲気の中で実施され、好評のうちに終了した。

## 市立図書館へのボランティア作業

また、ラオス・ビエンチャン市立図書館へのボランティア支援活動では、①雨樋部分へのペンキ塗り作業、②図書館の内壁への室内装飾作業、③書籍の修理作業の3つをツアー参加者が分担して従事。約5時間程度の作業であったが、図書館の館長をはじめスタッフからとても喜ばれるものとなった。

## 各施設への訪問と子どもたちとの交流

次に、子ども施設への訪問と子どもたちとの交流は、カンボジアでは、①シエムリアップにある「スナーダイクマエ孤児院」、②スラム街で識字教室を実施している寺小屋教室。ラオスでは、③ドンコイセンター（学校内に建設してある学童保育所のような施設）④ビエンチャン図書館併設の多目的ホール⑤ビエンチャン子ども文化センター（96年に自治労中央本部が建設した「ラオス子どもの家」）：の5施設を訪問、子どもたちと歌や踊り、卓球交流・折り紙やベーゴマ、紙細工などを一緒に作る等の交流を行った。



ラオスビエンチャン図書館での本の修復作業

## 現地でも活躍する日本人のNGOとの交流

また、カンボジアで活躍する日本のNGOである、①幼い難民を考える会（C Y K）、②国際保健協力市民の会（S H A R E）、③国際子ども権利センター（C R I G H T S）、④日本国際ボランティアセンター（J V C）のメンバーと交流した。また、ラオスの人身売買被害者支援NGO（a f e s i p）の視察を行った。

NGOのみならずとの交流で、国際支援には様々な活動があって、多くの日本人が活躍していることを知ることができた。



カンボジア寺小屋教室の子どもたち